SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

あのこと

2021 年／フランス映画
配給：ギャガ／100 分

2022（令和 4）年 12 月 10 日鑑賞 | シネ・リーブル梅田

Data　２０２２－１３６

監督・脚本：オードレイ・ディヴァン
原作：アニー・エルノー『事件』
出演：アナマリア・ヴァルトロメイ/ケイシー・モッテ・クライン/ルアナ・バイラミ/サンドリーヌ・ボネール／ルイーズ・オリー・ディケロ／アナ・ムグラリス／ファブリツィオ・ロン・ジョーネ

みどころ

なぜか「人工妊娠中絶モノ」は傑作揃い。『ヴェラ・ドレイク』（０４年）は２００４年のヴェネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞し、『４ヶ月、３週と２日』（０７年）は２００７年のカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞している。

そんな２つの名作に続いて、２０２１年の第７８回ヴェネチア国際映画祭で、ポン・ジュノ率いる審査員から絶賛され、審査員全員一致で金獅子賞を受賞したのが本作だ。このように、「中絶モノ」が次々と最高賞を受賞しているのは一体なぜ？

折りしも、米国では連邦最高裁判所判事の保守派 VS リベラル派の比率変化によって、それまで認められていた人工妊娠中絶の権利が狭められたが、本作の主人公やノーベル文学賞を受賞した原作者アニー・エルノーが生きていた１９６０年代のフランスでは？

堕胎天国の日本では考えられない中絶のための壮絶な戦いを、少し怖いけれども、しっかり目に刻み付けたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ “あのこと”とは何のこと？超話題作のテーマは？■□■

じいさん、ばあさんになってくると、誰でも物忘れがひどくなってくるため、「あれ、あれ！」とか「あのこと」という言い方が増えてくるが、まさか、それがそのまま邦題になるとは！１９８０年生まれのフランス人女性監督オードレイ・ディヴァンが監督、脚本した本作は、２０２２年にノーベル文学賞を受賞したフランスの女性作家アニー・エルノーの小説『事件』を映画化したものだ。

この原作は、アニー・エルノー自身の大学時代の人工妊娠中絶体験を題材にした自叙伝

的小説だが、そのタイトルがなぜ『事件』なの？また、本作はそれを原作として、オードレイ・ディヴァンが監督、脚本したものだが、なぜそのタイトルが「あのこと」なの？そして、“あのこと”とは一体ナニ？また超話題作たる本作のテーマはナニ・・・？

■□■「中絶モノ」は傑作揃い！次々と最高賞！それはなぜ？■□■

なぜか人工妊娠中絶をテーマにした映画は傑作揃いだ。『ヴェラ・ドレイク』（０４年）（『シネマ８』３３５頁）は２００４年のヴェネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞し、『４ヶ月、３週と２日』（０７年）（『シネマ１８』３３４頁）は２００７年のカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞している。

『ヴェラ・ドレイク』は、中絶が禁止されていたイギリスで、医師免許のない労働者階級の“ヴェラおばさん”が“若い娘さんたちの人助け”をする物語だが、ある日、施術した娘さんの身体に異変が起きたことから大事件に。他方、『４ヶ月、３週と２日』は、一人っ子政策の中国と違って、「産めよ増やせよ」の政策を取っていた、１９８０年代のルーマニアが舞台だ。そこでは、当然、中絶は厳禁。中学生にまで出産奨励をしていたらしい。そんな時代状況下、寮生活中の大学生が望まない妊娠をしてしまうのは本作と同じ設定だが、そんな級友のために、非合法の中絶手術に協力する親友が主人公になる。後述のようなノー天気な堕胎天国の日本とは違い、同作の中絶問題には、悪名高き秘密警察まで登場するからビックリ！どこかあなた任せの雰囲気が強い当事者に代わって、医師の選定、手術の場所、費用の段取り、必需品の準備など、秘密の作業にテキパキと働く主人公の姿は感動的だが、何かと手違いも生じるから大変。これほどまでに親友の中絶に協力、奮闘する原動力は一体ナニ？それが同作の真のテーマだった。

そんな２つの名作に続いて、本作は２０２１年の第７８回ヴェネチア国際映画祭で、ポン・ジュノ率いる審査員から絶賛され、審査員全員一致で金獅子賞を受賞！このように、「中絶モノ」が次々と最高賞を受賞しているのは一体なぜ？

■□■中絶の自由は？６０年代のフランスは？日本・米国は？■□■

東欧側のルーマニアはともかく、『ヴェラ・ドレイク』を見れば、西欧先進民主主義国たるイギリスでも長い間、人工妊娠中絶は厳禁だったことがよくわかる。その最大の根拠は、キリスト教が堕胎を禁止しているためだ。したがって、自由の国アメリカでも、中絶を認めるか禁止するかについては大変な論争がある。２０２０年１１月のトランプ（共和）VS バイデン（民主）の大統領選挙は微少差でバイデンが勝利した。そんな派手さはなくとも、それと同じように興味深かったのは、アメリカの連邦最高裁判所判事９名の人事を巡る争いだ。だって、その人事が保守派になるか、リベラル派になるかによって、中絶が OK になるか、NO になるかが決まるのだから。

それはともかく、フランスでは１９２０年以来、法律で避妊・中絶とそれに関する情報の流布を禁じており、違反者には刑罰もあり、妊娠を回避するには粗悪なコンドームに頼るか、運に頼るしかなかった、そうだ。しかし、１９６０年代以降のボーヴォワールをは

じめとする有名女性たちを先頭にした各種の中絶を認めさせる運動の中、ついに１９７５年のヴェイユ法によって中絶は医療行為としてようやく合法化された、そうだ。その経緯や問題点については、パンフレットにある髙崎順子氏のコラム「『あのこと』でアンヌが生きた時代と、それから。」に詳しいので、それを熟読する必要がある。

他方、そんな西欧先進民主主義諸国に比べ、日本にはキリスト教的視点から「中絶はダメ」という発想はないから、法律上の建て付けはともかく、基本的に中絶天国になっている。私の大学時代にも、何人かの友人がそのために医者に行ったり、カンパを募る姿があった。ちなみに、２０２２年１１月に実施されたアメリカ上下院の議員を選ぶ中間選挙は予想を大きく裏切り“赤い波”旋風は起きず、トランプ人気の翳りが顕著になった。しかし、そんな動きの中でも、２０２２年には女性の人工妊娠中絶権は合憲だとしてきた１９７３年の「ロー対ウェイド」判決が覆るという衝撃の事態が起きている。しかし、２０２４年の大統領選挙で再びトランプが大統領につけばそれが維持されるだろうが、バイデンの再選、もしくはバイデン以外の民主党候補が勝利すれば、連邦最高裁判所判事の構成が変わり、再び中絶についての判断の逆転も・・・？

■□■本作は原作以上に、トコトン主人公本人の視点から！■□■

本作の主人公アンヌ役でセザール賞有望若手女優賞を受賞した女優は、アナマリア・ヴァルトロメイ。朝鮮戦争のおかげで戦後復興を早期に完了させた日本は、一方では日米安保条約（６０年）を締結して、軽武装・経済重視政策を取り、他方では高度経済成長政策を目指したことによって、戦前は“象牙の塔”だった大学が大衆（庶民）に開放され、大学生の数が飛躍的に増えていった。１９６７年に大阪大学に入学した私は、そんな団塊世代の一人だ。

アナマリア・ヴァルトロメイが演じる本作の主人公アンヌはそれより少し前の１９６３年のフランスの大学生だが、大学の大衆化現象は日本と同じだったらしい。そのため、労働者階級の娘に過ぎないアンヌが大学に入ることができたわけだ。そのうえ、アンヌは教授からも特別視されるほど頭脳明晰だったから、学位を取って教師になる夢はすぐ目の前に近づいていた。

私の大学時代は学生運動が吹き荒れていたため、授業に出席したのは１回生の春から夏休みまでの２ヶ月程度、しかもホンの少しだけで、あとは全く授業に出ていない。それに対して、本作で寮住まいをしながらアンヌが過ごしている大学は結構厳しいようだ。しかし、教授に指名されて質問されてもアンヌの回答はパーフェクトだから、すごい。

本作冒頭、寮友のブリジット（ルイーズ・オリー・ディケロ）とエレーヌ（ルアナ・バイラミ）と楽しそうに語り合いながら学校に通う自信満々のアンヌの姿が描かれるが、目下の心配事は生理が遅れていること。これは、ちょっとした体調の問題・・・？そうであればなんの問題もなかったが、思い切ってかかりつけの病院に行くと、あっさり「妊娠している」と宣告されたからアレレ。アンヌはその場で「何とかして！」と頼んだが、それ

も「違法行為になる。加担したら刑務所行きだ。君もね」と即座に拒絶されたから、さあ、アンヌはどうするの？

ここまでが導入部、ここからが本筋突入だが、以降本作は予期せぬ妊娠問題の“処理”を、とことんアンヌの視点から描いていくので、それに注目！

■□■キネ旬の３氏も絶賛、新聞各紙も絶賛！■□■

本作については、『キネマ旬報』１２月下旬号（８４頁）の「REVIEW 日本映画&外国映画」では３人の映画評論家がそれぞれ星４つ、４つ、５つをつけて絶賛！新聞各紙の評論でも本作はそれぞれ絶賛されている。そこで語られているのは、概ね次の諸点だ。

①中絶に伴う主人公の肉体的な痛み
②妊娠週の表示に象徴される産む性の恐さ
③ヒロインの重さと、それに対比される男たちの軽さ
④手持ちカメラやスクリーンサイズが生む緊張感
⑤原作との対比
等々。

私は多くの評論家諸氏が書いている本作についてのそんな視点に何の異論もない。したがって、それと同じ事をここに書いても意味がないので、諸氏が全く触れていない本作の特徴（欠点）について、以下私なりにいくつか書いておきたい。

■□■“予期せぬ妊娠”は甘すぎるのでは！？■□■

本作のストーリー紹介では、ある日“予期せぬ妊娠”が発覚するという表現が使われている。人類史上最も“予期せぬ妊娠”はヨセフの妻マリアの処女受胎だが、それによって生まれてきた男の子は、通説では、人の子ではなく神の子イエス・キリストだから、これは唯一無二の例外だ。他方、処女であるのに妊娠するという、“想像妊娠”もあるそうだが、私はその実態を知らない。“予期せぬ妊娠”はレイプによって発生する可能性もある。ちなみに『灼熱の魂』（１０年）（『シネマ２８』６２頁）はそのレイプによる妊娠が大きなテーマだった。それに対して、本作に見る“予期せぬ妊娠”とは？

生理が来ないことを心配したアンヌが医師に診察してもらうと、あっさり「妊娠している」と告げられたが、その時アンヌは、医師からの「男性経験は？」の質問に対して「NO」と答えていた。大学生として懸命に勉学に励んでいるアンヌの姿を見て、私は「さもありなん」と思いつつ、それならなぜ妊娠したの？と思っていたが、本作中盤に登場してくるお腹の子の父親であるボーイフレンドの姿を見ると、アレレアレレ・・・。このヒロインは、このボーイフレンドと何度性交をしたの？（楽しんだの？）その時どんな避妊措置をとったの？避妊における彼女の役割は？男性の役割は？

本作のパンフレットには、女友達が多いと見込んだ同級生のジャン（ケイシー・モッテ・クライン）に、自分と同じ経験のある女性を紹介してもらおうと近づいたところ、「妊娠中ならリスクはないだろう」と逆に迫られるストーリーが紹介してある。これは、いかにも

女友達のブリジットやエレーヌに相談する勇気のなかったアンヌらしい行動だが、私に言わせればまったくナンセンス。まず誰よりも最初に相談すべきは、お腹の子の父親であるはずの、自分が何度も性行為をしたボーイフレンドではないの？そうすれば、場合によれば「子供を産もう。」「結婚しよう。」という提案が出たかもしれないし、逆に「中絶しよう。」となれば、その方法や費用等、何かと親身になってくれたかも・・・？しかるに、アンヌは、そしてまた原作者であるアニー・エルノーは、なぜそうしなかったの？本作のパンフレットにはこのボーイフレンドについてはキャスト紹介すらされていないが、それは一体なぜ？そんなことをあれこれ考えると、アンヌの妊娠は決して“予期せぬ妊娠”とは言えず、“予期すべき妊娠”だ。しかも、それはアンヌとそのお相手男性、２人の怠慢によるものではないの？

■□■『チタン』の出産シーンVS本作の中絶シーン■□■

２０２１年第７４回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したフランス映画『TITANE　チタン』（２１年）は、カーセックスで快感に浸った挙句、妊娠してしまった主人公というストーリーがハチャメチャなら、同作に見る主人公の出産シーンはまさかの感動だった（『シネマ５０』５０頁）。そして、それは『ジャスミンの花開く』（０４年）で観た、チャン・ツィイーの雨の中での出産シーン（『シネマ１７』１９２頁）をはるかに上回る衝撃だった。しかして、本作に観るアンヌの中絶シーンは？

中国の TV 歴史ドラマを観ていると、よく皇帝の寵愛を受けた女が妊娠すると、それに嫉妬した女が流産を狙って、いろいろな堕胎薬を飲ませるストーリーが登場する。それと同じように、中絶が法律で禁止されていたフランスでも、流産のための薬や方法はいろいろあったようだから、アンヌも一通りそれを勉強したのは当然。その結果、最初の病院であっさり中絶を拒否されたアンヌは、電話帳で調べた病院へ行き、食い下がった結果、注射液を処方してくれたからラッキー。私はそう単純に思い込むアンヌの知能レベルを疑わざるを得ないが、そんな思い切った行動をとってまで医師の診察を受けたにもかかわらず「流産はしていない」とのこと。そこでの、「出血したはずなのに」、「それは、粘膜を傷つけただけだ」との会話を聞いていても、私はアンヌの知能レベルを疑わざるを得ない。日に日に中絶期限の限界が近づいているアンヌだが、そこでやっと“闇の中絶手術”をしてくれる「ヴェラ・ドレイクおばさん」のような人を紹介してもらえたから、これはラッキー！？そこに見るアンヌの中絶手術は如何に？さらに、それでも中絶が成功しなかったため、最後の手段として何とも壮絶な命がけの中絶手術に及ぶことに。

女性にとって妊娠と出産は一生の大事だが、本作全編を通じて何度も登場する中絶シーンは、男の私には少しウンザリだし、少し恐ろしい。さあ、あなたの目には「チタンの出産シーン」VS「本作の中絶シーン」は如何に？

２０２２（令和4）年１２月２０日記